

令和6年5月1日（毎月1回1日）発行

昭和43年1月10日第3種郵便物認可

2024

No. 906

5 May

みちしるべ

MICHISHIRUBE



Contents

5月5日は何の日？／浜 幸寛.....	3
愛されていること／沖山聖也	4
外来種の脅威／竹尾 潤.....	7
著名人と聖書 第11回 フォードル・ドストエフスキー／古賀敬太	12



☆当月号および過去1年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。 <https://e-michishirube.com>

5月5日は何の日？

浜 幸寛



「5月5日は何の日？」と質問され、多くの人は「こどもの日」と答えるでしょう。普通の子どもにとって、その日は子どものための祝日として重要な日かもしれません。しかし私にとっては別の意味で重要な日なのです。それは、なんと私の誕生日なのです。私はこどもの日に生まれ、こどもの日に成人しました。そしてこのまま元気でいれば、やがてこどもの日に還暦を迎えることになるのです。

読者の皆様にとって、私の誕生日など無関係、無関心だと思われます。それが普通の反応です。しかし、私を生んだ母にとっては、5月5日は特別な日なのです。毎年、田舎に住む母が誕生日プレゼント

トにお菓子を送ってくれます。私はすでに成人した子ども達がいる年齢ですが、母にとって私という存在は、何歳になってもお菓子で大喜びする「子ども」なのかもしれません。

さて、天地万物を創造された創造主である神は、私たちを唯一無二の最高傑作として創造された本当の生みの親なのです。いつも私たちのことを心配し、私たちの一生を良いもので満たしたいと、配慮しておられるお方です。預言者イザヤを通して神はこのような言われました。

「女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとえ女たちが忘れても、このわたしは、あなたを忘れない。」

（イザヤ書49章15節）

私たちが生き、動き、存在しているということは、誕生日があり、生んだ親が存在し、いのちをお創りになった創造主がいるということです。生みの親よりもはるかに大きな愛を示して下さった創造主はいったいどのようなお方なのでしょう。こどもの日」を機に、少し思いを寄せて頂ければ幸いです。

愛されていること

沖山 聖也 たかや

これに続く指示が特殊でした。

「言葉を一言も聞かずに育った赤ちゃんは、何語を話すようになるのか？」

このような疑問から、今から約800年前、神聖ローマ帝国（現在のドイツの前身）のフリードリヒ2世という王様が、ある実験を行ったそうです。彼は、生後間もなく捨てられた50人の赤ちゃんを集め、次のような条件のもと赤ちゃんを育てるよう指示しました。

- ・ 食事（ミルク）を与えること
- ・ お風呂に入れること
- ・ おむつを替えること

——と、ここまででは、ごく普通のことですが、

- ・ 赤ちゃんの目を見ないこと
- ・ 赤ちゃんに笑いかけないこと
- ・ 赤ちゃんに話しかけないこと

王様の指示をしっかりと守る乳母たちによって、これらの赤ちゃんたちは育てられたのでしようが、この実験はほどなくして思いもよらない結末を迎えます。それはあまりに悲惨なものでした。50人の赤ちゃんは全員、言葉を話せるようになる前に亡くなってしまったのです。（説にもよりますが、1歳までにほとんど全員が亡くなったようです。）



今では絶対に考えられないような恐ろしい実験ですが、この話は子育てをする上でのコミュニケーションの大切さを教える話として伝えられています。生きていく身体的環境が整えられていたとしても、それだけでは人は生きていくことはできない、自分と目を合わせ、笑いかけてくれる、自分を大切にしてくれる存在があること、すなわち「愛」を感じることが生きていく力になるのではないか、と考えさせられます。

日本人は少々この「愛」を表現したり受け取ったりするのが苦手なようです。大切な人、愛する人に対しても直接、「大切だよ」「愛してるよ」とは言わない人も多いのではないのでしょうか。逆にストレートに言われても困るということもあります。照れ隠しなのかもしれませんね。

聖書は神が人にあてたラブレターと表現されることがありますが、その言葉の通り、聖書の中に何度も何度も、神様が人を愛しているということが、神様自身のことばとして書かれています。少

し変な言い方になりますが、神様は恥ずかしげもなく私たちへの愛を表現しています。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ書43章4節）

冒頭の実験で、赤ちゃんの実際の親たちがこの実験の結果を知ったら、どのような気持ちになったでしょう。たとえ何らかの事情で子どもを手放さなければならなかったとしても、その子どものことは、その後も決して忘れることはできないでしょうし、その子には元気で生きながらえてほしいと願っていたはずです。

しかし、もし仮に実の親がわが子を忘れるようなことがあったとしても、神様は絶対にあなたを忘れることはないのです。（イザヤ書49章15節）それほど神様にとって私たちは大切な存在なのです。

神様の愛と言われても、そんなものいらないという方、私には愛される資格がないという方、い

ろいろな方がおられると思います。

しかし確かに神様は、親が子愛するるように、その愛以上に、すべての人を「高価で尊い、愛する存在」として見ておられます。あなたが今現在、神様を拒絶しているとしても、自分に価値がないと言ったとしても、です。

「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」（ローマ人への手紙5章8節）

このように神様の愛は、目に見える形として表れました。神様の大切なひとり子であるイエス・キリストは、私たちすべての罪人の身代わりとなつて、十字架で死なれたのです。神様は、私たちの状態に関係なく、私やあなたを愛してくださいいます。ひとり子イエス・キリストを十字架で犠牲にするほどに愛しておられます。それほどまでに、私たちは神様の目に「高価で尊い」のです。

神様の変わることのない愛は、いまこの文章を読んでくださっている皆様に向けられています。神様の愛と救いは、私たちに生きる力を与えてくれます。皆様には聖書を通して、神様のこれ以上ない愛をぜひ知っていただきたいと願っています。最後に、イエス・キリストの姿から神の愛を知ったヨハネという弟子のことを紹介します。

「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によつて私たちにいのちを得させてくださいました。それによつて神の愛が私たちに示されたのです。」

（ヨハネの手紙第一・4章9節）

「私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。」（同16節）

どうかあなたを愛している神様の愛を知り、その愛を信じていくことができますように。

外来種の脅威

竹尾 潤

毎年5月頃になると、近所を流れる川の土手に、一面、黄色い花が咲き乱れます。いつもその時期にその土手を通るたびに、きれいだなと思っ
てはいましたが、草花にそれほど興味があるわけでもないのに、そう
思うだけで、そのまま年月は過ぎていきました。

それでもある時、その花が一面咲いている光景をスマホの写真に撮っ
て、たまたま人に見せたところ、それが「オオキンケイギク（大金鶏菊）」
という外来種の花であると教えてもらいました。

オオキンケイギクは北米が原産で、明治時代に日本にも観賞用として
入ってきたようです。その繁殖力はとても強く、一旦野外に定着して咲
き出すと、またたくまに繁殖して、もともと咲いていた花を駆逐してしまう
そうです。そのため、近年、「特定外来生物」に指定され、今では栽培や販売などが禁止されているとのこと
です。

同じように栽培が禁止されているケシの花は、麻薬の元となるので、社会にとつて危険なもの
になることは認識しやすいのですが、それに対しオオキンケイギクは、そこまで危険な存在とい
う感じはしません。しかし、生態系を破壊してしまうわけですから、日本の自然界で咲いてい



オオキンケイギク



オオキンケイギク

ることが好ましくないのは確かです。

何も知らないで見ているときれいに思えるものでも、事情がわかると、実際はさまざまな問題が潜んでいるということを感じました。

また外来種といえば、このようなこともありました。郊外の田園地帯を歩いていたとき、道の真ん中に今まで見かけたことのない動物の死骸が横たわっていました。形はネズミによく似ているのですが、それよりもずっと大きく、サイズとしてはタヌキやイタチに近いように思われました。ただ尻尾が細いのでそれらとも違うようでした。

その後気になって調べてみたら、それは「ヌートリア」という動物でした。南米が原産で、一応ネズミの一種ということでした。20世紀初頭に日本に輸入され、日本語では沼狸とか洋ドブネズミとも呼ばれているそうです。戦争中は毛皮などに利用されていたそうですが、その需要が少なくなり、放逐されたものが野生化したそうで、現在では主に西日本で多く見られるようです。

ヌートリアは、稀少な虫や貝を捕食するため、生態系に悪影響を及ぼし、さらには農作物を食い荒らすため、人の生活にも被害をもたらすそうです。そのため、やはり「特定外来生物」に指定されており、駆除の対象となっているとのことでした。（ただ駆除自体は誰にでもできるわけではなく、動物保護法の関係で狩猟免許を持った人が自治体の許可を得た上でしかできないそうです。）

そういう意味では、オオキンケイギクのような植物よりも、実害は大きいと言えます。ヌー

トリアは、外見はカワウソやビーバーにも似ているとも言われ、少なくとも凶暴な感じはしません。でもそのような一見無害のような動物に見えて、実は色々と悪影響を与えることがあるのですから、意外なものです。

外来種は、もともとその国や地域にないものが何らかの理由により持ち込まれ、そこに悪影響を及ぼすわけですが、そのことをとおして、ある別のことを教えられます。―それは「罪」の問題です。私たちの心の中にある「罪」というものも、外来種によく似ているところがあると思うのです。罪はもともと人間の中にあつたものではありません。外部（サタン）から持ち込まれたものです。聖書によると、人間が神様に創造された時、まったく問題のない、完全な状態でした。しかしサタンにそのかされて、最初の人アダムとエバが神様の命令に背き、そのことによって人間の中に罪が入ってしまいました。（創世記3章参照）そうするとその罪は、私たちの中に巣食って、私たちの生活の中に様々な悪影響を及ぼすことになりました。

人間社会の中では、たえず人は、いがみ合ったり、憎しみ合ったりします。そのいがみ合いが国家間に発展すると戦争というものが引き起こされます。このような対人関係のさまざまな問題は、実は私たちの中にある罪が原因と言えるのです。

またその罪には恐ろしいほどの繁殖力があるのです。外来種に関しては、わが国は法律で規制することによって、その脅威を取り除こうとするわけ



ヌートリア

ですが、一旦その地に根付いたものを根絶するということは、なかなか難しいことです。そもその地域が増えていく外来種は、強靱な繁殖力があるからこそ、そのような状態となるのです。アダムとエバに入った罪は、その二人にとどまることなく、そのまま全人類に増え広がることとなったのです。(ローマ人への手紙5章参照) 罪は一旦中に入ってしまったと、なかなか取り去ることはできないとても厄介なものなのです。それは決して容易なことではありません。そして罪は私たちに、死と死後のさばきをも、もたらすこととなりました。

しかし罪は、それだけ危険なものでありながら、必ずしもそのように思えないところが、特に恐ろしいところなのです。

通常、罪と言うと、犯罪のようなとても悪いことをする事例としか考えていないと思います。しかし罪とは外面に現れた悪い行為だけではありません。たとえば人を憎たらしいと思うなど、心の中の小さな罪も私たちが永遠のさばきへと送るのに十分なものです。青酸カリはわずか0.2〜0.3gで人を死に至らしめます。罪も同様に、わずかと思えるものが、その人を滅びへと至らしめるのです。罪には「これぐらいは大丈夫だろう」ということが全くないのです。

またさまざまな罪の中には、一見悪くないと思えるものが、実は神様の前には罪であるということがあります。たとえば偶像礼拝などは、多神教の社会ではむしろ美德とされますが、唯一の神様の前には、最も重い罪なのです。また昨今では社会的に認められつつある同性愛も、男女という性別を、目的を持って創造された神様の前には、やはり罪なのです。(ローマ人への手紙1章26・27節他) サタンは、罪をそれと分らないようにカモフラージュすることが得意なのです。

そしてその罪を私たちから取り除くということは、アダム以来、人類にとって最も大きな課題と言えるのです。

しかし罪を取り除くことは誰にでもできることではありません。いや、私たちの中で誰ひとりそれを行うことはできません。なぜならそれは全く罪のない人でなければ、その資格を有しないからです。

唯一その資格があるのが、神の御子であるイエス・キリストなのです。

「キリストは罪を取り除くために現れたのであり、この方のうちに罪はありません。」

(ヨハネの手紙第一・3章5節)

この聖書のことばの通り、イエス・キリストは私たちの罪を取り除くために、今から約2千年前、この地上に来られました。それは私たちの罪をすべて一身に引き受けて、私たちに代わって、罪のさばきを受けるためでした。神の御子の十字架上の死は、私たち人類の罪を一度に取り除くのに、十分すぎる犠牲でした。

ただしその効果が私たちに実際に及ぶには、その犠牲が自分自身の罪のためであったことを、はつきりと認める必要があるのです。そのことこそが聖書が救いの唯一の条件として掲げる「信仰」なのです。

ぜひ、罪の恐ろしさを知って、それと同時に、そこから救われる方法があるということも知りになれますように。

著名人と聖書（第11回）

古賀敬太

フョードル・ドストエフスキー（1821—1881）

— 悪 霊 —

ドストエフスキーの著作を読み解く鍵

今回取り上げるドストエフスキーの『悪霊』（1872年）は、時代的には『罪と罰』（1866年）と『カラマーゾフの兄弟』（1879年）の中間に位置する長編小説です。

ドストエフスキーの著作を読み解く鍵は、彼が著作の冒頭に掲げる聖書の引用にあります。たとえば『カラマーゾフの兄弟』の場合には、イエスの十字架の贖いを予告する、ヨハネの福音書12章24節が引

用されており、『悪霊』の場合は、ルカの福音書から引用されています。イエスが悪霊に憑かれている人から悪霊を追い出した結果、その悪霊が豚に入り、豚の群れが全滅してしまいますが、悪霊を追い出された人は正気に返る箇所です。

「ちょうど、そのあたりの山に、たくさん豚の群れが飼われていたので、悪霊どもは、その豚に入ることを許してくださいと懇願した。イエスはそれを許された。悪霊どもはその人から出て、豚に入った。すると豚の群は崖を下って湖へ流れ込み、おぼれて死んだ。飼っていた人たちは、この出来事を



ドストエフスキー

見て逃げ出し、町や里で、このことを伝えた。人々は、起こったことを見ようと出て来た。そしてイエスのところに来て、イエスの足もとに、悪霊の去った男が服を着て、正気に返って座っているのを見た。それで恐ろしくなった。見ていた人たちは、悪霊につかれていた人がどのように救われたか、人々に知らせた。」（ルカの福音書8章32〜36節）

『悪霊』の主人公スタヴローギン

『悪霊』執筆のきっかけは、「ネチャーエフ事件」（1869年）にあります。当時モスクワ大学の学生であったネチャーエフは、革命を行うために五人組を組織します。その一人であるイワノフが裏切ったことで、ネチャーエフと仲間によって殺害され、ロシア社会に深刻な衝撃を与えます。

『悪霊』では、ネチャーエフに模したピョートル、イワノフに模したシャートフという人物が登場しますが、この二人に圧倒的な影響力を持つのが主人公のスタヴローギンです。彼は、彼のことを神のよう

に敬う人々に取り憑き、彼らに無神論、虚無主義、超人思想そして革命思想を吹き込み、その他の一切の登場人物を飲み込んでいきます。

スタヴローギンは大学を卒業して軍務に服した後、放蕩に身を持ち崩し、複数の女性と関係します。きわめつけは、ペテルブルクにおいて小間使いの少女マトリョーシャを陵辱したことです。彼女は納屋で首をくくってしまっています。彼は仮面の様な美しい顔と冷静沈着な行動のゆえに、神を恐れず、善悪を超越して行動しているにもかかわらず、多くの人々を魅了するのです。

スタヴローギンに取り憑かれる人々

無神論者で革命家の親玉として振る舞うピョートル、そして革命を裏切り、ロシア国民を神とするスラブ主義者に転じ、最後に殺害されるシャートフはいずれもスタヴローギンに取り憑かれた人々です。

またその一人であるキリーロフという革命家は、自分こそ神であると主張して、自分が神から自由な

存在であることを証明するために自殺を執行します。スタヴローギンは、キーロフの心に毒を盛り、彼の心に虚偽と中傷を吹き込んで、彼の理性を発狂状態に持ていったのです。

『悪霊』の結末

『悪霊』の冒頭の聖句では、悪霊に取り憑かれた豚が全滅する様子が描かれています。『悪霊』の登場人物の最期も悲惨です。前述のようにシャートフは殺害され、キリーロフは自殺しますが、主人公のスタヴローギンも最後に首を吊って死にます。

ドストエフスキーは、神に反逆し、神が定めた道徳律を破壊し、自らを神の座に置くことが、いかに悲惨な結果をもたらすかを示そうとしました。人間にいのちを与え、生かしておられる神を否定することとは、取りも直さず自分を滅ぼすことです。彼は『悪霊』の中で、「人間存在の全法則は、人間が常に限りなく偉大なものの前にひれ伏すことができるという一事につきまします。もし人間から限りなく偉大なもの

のを奪い去るなら、人間は生きることをやめ、絶望のあまり死んでしまわうでしょう。」と述べています。この「限りなく偉大なもの」とは神のことです。聖書における悪霊の働きは、人に取り憑いて神に反逆させ、神の計画を打ち壊すことにあります。『罪と罰』では、神の存在を無視し、神の掟を踏み越えて殺人を犯すラスコーリニコフ、『カラマゾフの兄弟』では、悪魔にそそのかされ、民衆を奴隷化し、物質的・権力的支配を行う「大審問官」がそうです。ドストエフスキーは、目に見える現実の背後にある、神と悪魔の戦いという霊的現実を目を注いでいました。

破壊から新生へ

『悪霊』には、『罪と罰』のソーニヤや『カラマゾフの兄弟』のアリユーシヤやゾシマ長老のように、神を恐れ、神を愛して、神の側に立つ人々は登場してきません。終わりの、スタヴローギン初め、関係者の自殺や殺害という悲劇的結果です。

しかし『悪霊』の最終章にあたる「ステパン氏の



最後の放浪」では、一転して破壊後の新生ないし信仰の復活が語られています。ドストエフスキーは、人間の新生の希望をこのステパンに託します。ステパンは革命家ビョートルの父親で、スタヴローギンの家庭教師でもあり、彼らに神に対する疑いの種を蒔いた自由思想家です。

その彼が晩年になって、今までの自分の人生を清算するために家を飛び出して放浪し、死の間際で、身の回りの世話をしてくれた聖書売りの女性ソフィアから、冒頭のルカの福音書の悪霊の記事を読んでもらいます。彼は、キリストによって悪霊を追い出された病人の新生の姿に心を打たれ回心し、「今、僕はわくわくしています。」と喜びの言葉を発して亡くなるのです。

ドストエフスキーは、悪霊を追い出された人に、新しいのちの始まりを見ていました。聖書にこうある通りです。

「だれでもキリストのうちにあらなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

（コリント人への手紙第二：5章17節）

ドストエフスキーの言葉

ドストエフスキーは、イエス・キリストが自分の罪の赦しのために十字架にかけられ、復活された救い主であることを信じていました。彼は、ある母親への手紙（1878年）で「キリストよりも素晴らしいものは何一つ考えられるものではありません。どうかこのことを信じて下さい。」と書き送っています。

【参考文献】

ドストエフスキー『悪霊（上、下）』

江川卓訳、新潮文庫、2021年

みちしるべ5月号 第906号

令和6年5月1日（毎月1回1日）発行

発行所 伝道出版社
〒183-0056 東京都府中市寿町 2-8-9
TEL 042-366-7760
FAX 042-366-7790

編集人 伝道出版社 編集部
<https://dendoshuppan.shop-pro.jp/>

印刷所 株式会社 共同印刷所

昭和43年1月10日第3種郵便物認可

令和6年5月1日(毎月1回1日)発行

みちしるべ5月号 第906号

伝道出版社
〒113-0056 東京都府中市寿町2-8-9



定価1部50円+税
送料63円
振替00140-927336

Column 

ブラックホール

ブラックホールは強力な重力を持つ天体です。光さえもその重力から脱出できないため、長年の間、直接観察することが不可能な「見るができないもの」でした。

しかし近年、ある研究グループが、世界各地の電波望遠鏡を連携させ、高性能な1台の望遠鏡として運用し、ブラックホールの観測に成功しました。ブラックホールは、重力でねじ曲げられたガスの光に囲まれた、黒い穴のような姿で観測されたのです。

聖書の語る「神」も、私たちは直接見るできません。ブラックホールを観察したような最先端の技術を駆使しても人間は見るできません。しかし、世界中で多くの人々がその存在を信じています。「神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。」(ローマ人への手紙1章20節)

この世界のあらゆるものを細かく調べ、見つめるとそれが非常に精巧に構成され、機能していることに気づきます。そこに設計者である神の英知が見て取れるのです。

どうか、この世界を形造られた神の存在を知り、その救いを受ける方となられますように。
(白井達也)

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。